



RIICC Newsletter

October 31, 2013



Osaka Jogakuin (Wilmina) University

Research Institute of International Collaboration and Coexistence

大阪女学院大学 国際共生研究所 <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/RIICC>
540-0004 大阪市中央区玉造2-26-54 e-mail: riicc@wilmina.ac.jp

Contents

巻頭言	「英語の世紀」と英語科教員のジレンマ	中井 弘一	1	研究活動報告	Project1 (年間報告)	黒澤 満	6
論説	国際共生とは何か	黒澤 満	2		Project1 (講演会報告)	奥本 京子	6
研究会開催報告			3		Project2 (年間報告)	Brian D. Teaman	7
書評1	入門 人間の安全保障	西井 正弘	4	研究所所員 自著紹介		馬淵 仁	7
2	CLIL (内容言語統合型学習)	寺 秀幸	4	シリーズ研究所紹介			
書籍紹介1	The Roles of Language in CLIL	Tamara Swenson	5	1 東洋大学国際共生社会センター		北脇 秀敏	8
2	Buying your Way into Heaven	前田 美子	5	2 上智大学グローバル・コンサーン研究所		中野 晃一	8
3	文化と外交	香川 孝三	5	編集後記		東條 加寿子 / 西井 正弘	8

巻頭言

「英語の世紀」と 英語科教員のジレンマ

中井 弘一

グローバル化が進む中、インターネットの情報通信技術の急激な進展などにより、世界は「英語の世紀」になったと言われている。共通の母語を持たない人同士の主要リング・フランカ (Lingua franca) が英語となり、英語は世界における「普遍語」となった。

こうした情況に、最近の新聞報道には英語教育改革の政策提言が踊る。4月には自民党教育再生実行本部が「大学入試の受験資格としてTOEFLを導入する」を提言した。5月1日の朝日新聞朝刊「争点」には、TOEFL導入に関して、自民党教育再生実行本部長・遠藤利明衆院議員と和歌山大学江利川春雄教授との論争が掲載された。遠藤氏は、「シンプルな話です。学校で、話せる英語を学べるようにしましょうということです。話せるようになった方がいいじゃないですか。これまでの英語教育がうまくいっていないから、変えないといけません」。それに対し江利川氏は「体育の授業の目標を国体出場レベルにしようといっているようなもの…。学校教育では基本的な文法や音声、語彙などの土台づくりと言語の面白さを教えるべきである」。その後5月、政府の教育再生実行会議は小学校での英語教育の教科化と開始学年引き下げを求めた。

グローバル人材育成は必要なことであるが、その対処として英語が話せばいいという短絡的な施策には学校現場は戸惑うのではないかと。「教育再生」とは、「今の教育は生きていない」を前提とする表現であり、小・中学校・高等学校の教員はやりきれない思いであろう。その場のやりとりであとに残らない「話し言葉」の英語と、いつでも誰でも分かる形で伝える「書き言葉」の英語の両方

を運用できる能力を育成することが学校教育の場においては大切で、どちらかに力点が置かれるものではない。

グローバル人材の育成として論理的思考力や批判的思考力の育成も求められている。英語科目では、英語の言語特性からその育成が一層求められる。英語は「何が何をどうした」という因果関係を明確にする語順構成の表現である。たとえば中学校の授業で、「(外国人に)あなたはなぜ日本に来たのですか」を日本語感覚で“Why did you come to Japan?”と教えたとする。しかしながら、それは「何をするために来たの?」と失礼な表現で、“What brought you to Japan?”とネイティブなら言うところのクレームがつく。日本語発想では、感情表現などのように「人」を主語にして、「私はそれに驚いた」「私はその本に興味がある」と「何がどう」ではなく自分の心に浮かんだものとして表現する。しかし、英語では、“I was surprised at it.” “I’m interested in the book.”のように受け身表現を使い、「何が私をどうするのか」その因果関係をはっきりさせる。日本語の疑問文は、「あなたは図書館へ行きました…か」のように最後まで聞かないと分からない。英語では、“Did you go to the library?”と語の倒置により最初に疑問文と標示している。こうした言語特性が英語のディベート力を付けなければ国際交渉力は身につかないと言われる要因の一つである。

ただ、このように英語は論理的な言語で日本語より優れていると教えれば、日本語衰退への片棒を担ぐことにならないだろうか。英語では、“I love.” “Love you.”では意味を成さず、“I love you.”と言わなければならないが、日本語では、フルセンテンスの「私はあなたのことを愛しています」より、「愛しています」という情況表現を好む。宮澤賢治の「雨ニモ負ケズ」は最後になるまで主語は語られないが、そうであるからこそこの詩の良さがある日本語の言語表現の特性をしっかりと伝えることも英語科教員としての務めであろう。「英語の世紀」は、日本語を捨てるということではない。今の潮流に流されそうになるが、そのことは心得ておきたい。